

未来永劫美しい

辻 憲男（文学部教授）

金閣寺は昭和25年（1950）7月2日に焼けた。新聞は「美しさに対するねたみ」と報じた。三島由紀夫の小説は事件をもとに、青年僧「私」のゆがんだ自意識と、美の観念の恐ろしい終末を描いた。

父はよく「私」に語った。「金閣ほど美しいものはこの世にない」。未知のところすでに美というものが存在していることに、「私」は不満と焦躁を覚えた。「私」は美から疎外された存在だった。やがて「私」は寺の徒弟になり、戦争で金閣と共に焼き亡ぼされるだろうことを夢想した。

しかしとうとう空襲は来なかった。終戦の日、金閣は「昔から自分はここに居り、未来永劫ここに居るだろう」という表情を取り戻していた。無益な気高い調度品のようにしんとしていた。「森の燃える緑の前に置かれた、巨大な空っぽの飾り棚」であるのに、「金閣が折々に示した美のうちでも、この日ほど美しく見えたことはなかった」。「私の心象からも、否、現実世界からも超脱して、どんな種類のうつろいやすさからも無縁に、金閣がこれほど堅固な美を示したことはなかった！ あらゆる意味を拒絶して、その美がこれほどに輝いたことはなかった」。

終戦の年の夏、三島自身はというと、勤労働員先の寮で空襲警報におびやかされた。書きかけの原稿を抱えて防空壕に逃げ込んだ。穴から見る遠い大都市の空襲は、篝火（かがりび）のように美しかった、という。…『金閣寺』を書くなかで、作者は丹後へも取材に出かけた。だが舞鶴の町よりも、由良（ゆら）の荒涼たる海辺が主人公の動機と強く結びついた。その時、小説家と「私」とはほとんど一心同体であった。



金閣寺は再建であるが、今も京都随一の観光名所。